

岩原古墳群

—集中豪雨被害箇所修復工事に伴う、 平成14年度緊急発掘調査報告—

熊本県立装飾古墳館

第1章

第1節 調査に至る経過

平成13年6月28日・29日、熊本県立装飾古墳館のある岩原台地一帯を集中豪雨が襲い、崩落が起きた。もともと岩原台地の基盤は阿蘇溶結凝灰岩であり、台地端部は脆く崩れやすい。その時の崩落箇所は、岩原古墳群のなかの馬不向3号墳の東側と、下原古墳の北側で双子塚古墳の前方部側から北東隅にあたる急傾斜地の2カ所であった。

平成13年度業務日誌によると、次のような対処がなされていた。6月30日、被害確認。7月4日、本庁文化課被害状況視察。同月5日、ぬかるんだ地盤が乾燥するのを待って、シート・ロープ等で危険箇所を覆い2次災害の予防措置。同日、管理主体である鹿央町教育委員会から、国史跡岩原古墳群の毀損届（文化財保護法73条の2）を熊本県教育委員会に提出。

これを受けて熊本県教育委員会は、平成13年11月、国宝重要文化財等保存整備費の補助金交付を申請した。また、具体的な修復は、鹿本地域振興局土木部と協議を重ねた結果、景観を保護することを前提に、馬不向3号墳東側ではブロック積工法で、双子塚古墳から北東隅の急傾斜地では安定勾配を確保した大型ブロック積工法で、施工することが決まった。この決定により、芝生養生面のみが崩落した馬不向3号墳では、復旧工事のみとすることが決まった。

さらに、双子塚古墳の前方部から北東隅の急傾斜地では、安定勾配を確保するため崖下の新たな土地買収と共に、台地縁辺部を削平する必要がでてきた。このため、熊本県立装飾古墳館では、平成14年度の土地買収完了を待って、削平予定箇所の緊急発掘調査に着手した。

第2節 発掘調査、整理作業等の経過

発掘調査（平成14年度）

10月11日 文化財保護法58条の2第1項により埋蔵文化財発掘調査の通知。

10月16日 重機による表土剥ぎ。

10月17～20日 県立装飾古墳館主任学芸員池田朋生、嘱託吉里美枝子、同大友由紀、他作業員1名により遺構検出。

10月21日 遺構数を確定、調査行程の検討を行う。

10月30日 作業員投入、本格調査に入る。

11月12日 分館主任学芸員矢野祐介、調査参加。

11月13日 地形測量終了。

11月14～20日 IV層下面で確認トレンチの掘削。

11月23日 調査機材撤収、調査終了。

11月24日 山鹿警察署宛、遺失物法第13条により埋蔵物発見の通知。

整理作業等（平成14年度・平成16年度）

平成14年11月28日～12月4日 熊本県文化財資料室で、出土遺物の水洗・注記・土器接合。

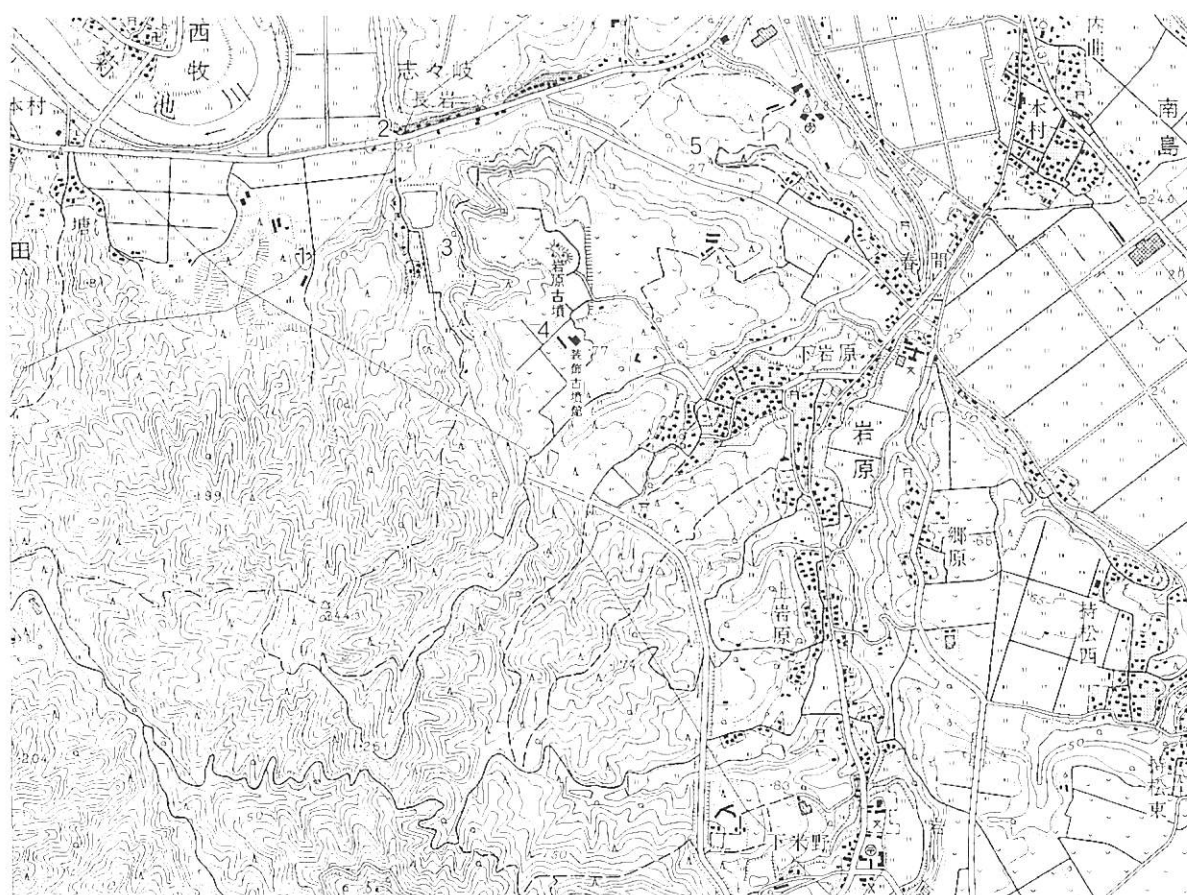
縄文土器等の一部はバインダーによる硬化処理を行う。

平成14年1月 肥後の至宝展Ⅰで資料公開。

平成17年1～2月 遺物実測・原稿執筆。

第2章 古墳群を取り巻く環境

岩原古墳群のある岩原台地は、基盤に阿蘇溶結凝灰岩が厚く堆積する、菊池川の支流岩野川沿いの洪積台地の一つである。この台地は、菊池川の中流的な景観と下流的な景観を分ける米野岳の東麓に位置する。標高77m前後。岩野川からの比高は、約50mを測る。周辺には同様な台地が八つ手状に広がっており、壮年期の浸食地形が認められる。崩落箇所が大きくえぐれ、2次災害を招く恐れがあったため、遠方からの肉眼観察にとどめざるをえなかったが、断面観察によると腐食土層下部のローム層が大きく2枚に分かれて堆積していることが確認できた。さらにこの2枚の間には、薄いピンク色の土層堆積が認められた。薄いピンク色の土層を挟む



1小原浦田横穴群 2長岩横穴群 3岩原横穴群 4岩原古墳群 5桜の上古墳群

図1 周辺関連遺跡分布図

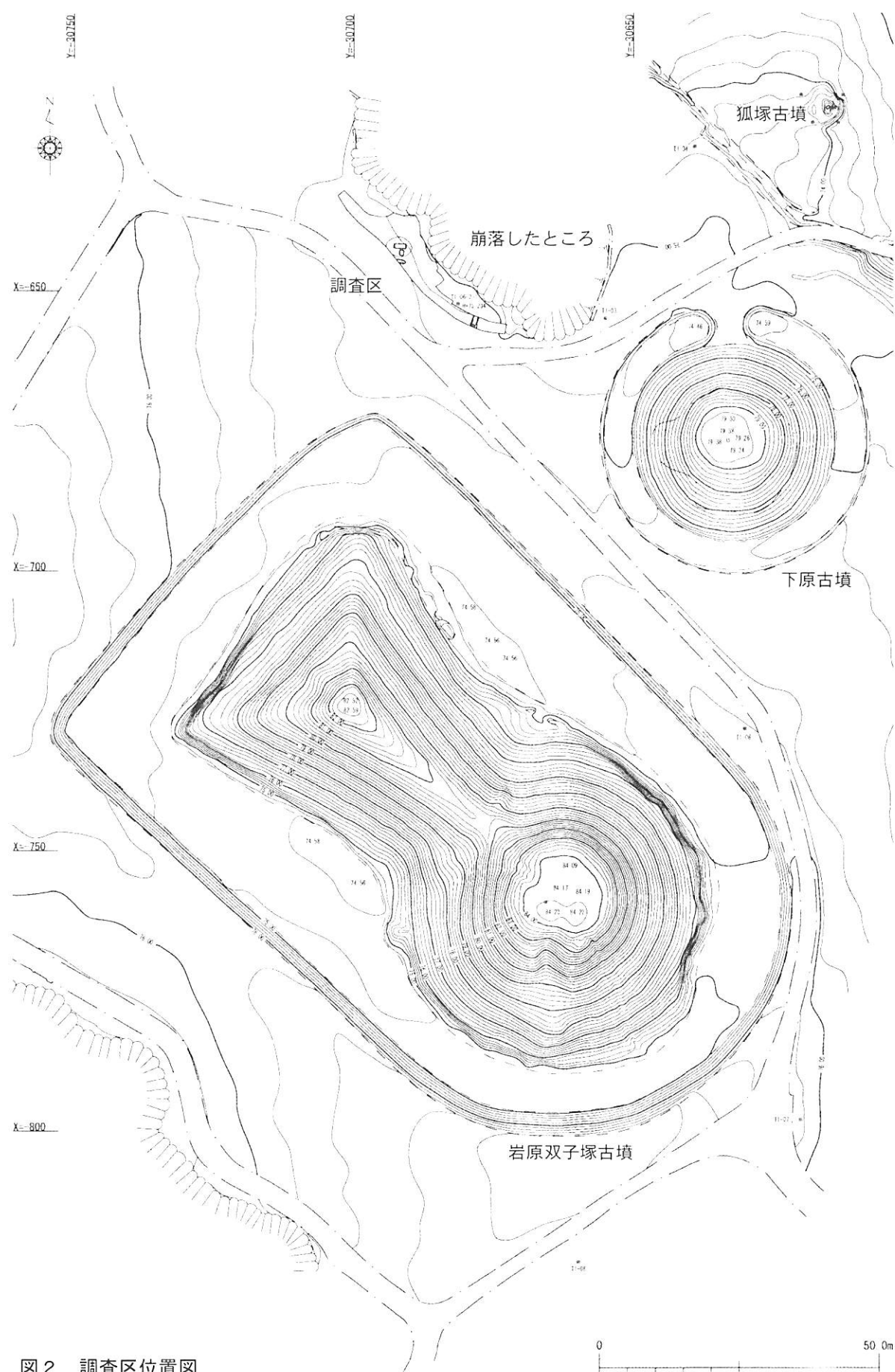


図2 調査区位置図

上下の厚いローム層は、従来から鳥栖ローム・八女粘土と呼ばれる、阿蘇4火山性噴出物の再堆積層、若しくは溶結凝灰岩上層の非溶結部分と考えられる。

周知の通り、岩原古墳群は、墳丘全長102mの双子塚古墳を中心に、下原古墳・寒原1号・寒原2号墳など、大小の円墳、円形周溝墓からなる熊本県下有数の古墳群である。そのほとんどは、昭和56年の周溝確認調査の結果を基に、「肥後古代の森鹿央地区」として整備され、盛り土で保護された。そのため整備以前のままの姿が見られる古墳は、双子塚古墳の墳丘の他は、昭和40年の農道建設時に露出した寒原2号墳(墳丘北側の主体部断面、墳丘は盛り土による復元)、「肥後古代の森鹿央地区」の外にある狐塚古墳(石室の一部が露出)などに限られる。

中でも、双子塚古墳は、電気探査により後円部に盗掘坑らしき横穴が認められたものの、主体部には達していないことが判明しており、数少ない未開封の主体部を残すものとして、その墳丘と共に貴重な存在である。今もなお、岩原地区の住民は、墳丘そのものを掘り返すことはおろか、石(葺き石?) 1個持ち帰ることすらタブー視している。このように、この地が神聖な場であることは今も変わっていない。

文化財保護の意識が高まる以前、千年以上の間、大きく削られることなく残ってきた背景には、例えば神の空間として守られる、神社のような「鎮守の森」的な思想があるのかもしれない。今後は、熊本を代表する前方後円墳がどのようにして残されてきたのか、「崇り」「畏れ」「敬い」の思いが語り継がれていくシステム自体を調査の対象とすることも視野に入れるべきであろう。

また、著名な古墳群でありながら、古墳時代の歴史的な意義付けをするには、その実態が今ひとつ不明瞭である。特に、双子塚古墳が造立された時期については、墳丘そのものの形状、採取された埴輪の所見などから複数の意見が出され、決着をみていない。主墳の時期についてコメント出来なければ、同時期の菊池川流域の古墳時代を粗描することさえも難しい。原因の一つは関連調査の報告、並びに周辺の古墳で採取されてきた埴輪片・須恵器片の整理報告が少ないことがあげられる。それは、周濠調査によって得られた資料についてもしかりである。かつては四十八塚と呼ばれ、周辺の畑地耕作の際に出土した石棺の話をよく耳にする。その意味で、熊本県立装飾古墳館が果たさなければならない役割は大きい。熊本県立装飾古墳館では、こうした古墳群そのものの広がりも可能な限り聞き取り調査を行ったうえで、今後関連資料の紹介を続けていくこととしたい。

第3節 岩原古墳群調査略歴

調査年度	調査内容	調査主体	内容	備考
昭和27・28・29	測量調査等	玉名高校考古学部・山鹿高校考古学部	岩原古墳群	熊本史学12号
昭和40年	緊急調査	山鹿高校考古学部等	寒原2号墳	熊本史学29号
昭和56年	周溝確認調査	熊本県教育委員会	双子塚・下原・馬不向・寒原・寒原2・参考地A / B / C※1	熊本県文化財調査報告第55集
平成元年	緊急調査	熊本県教育委員会	寒原4 / 5等	本館建設予定地

平成3年	周溝確認調査	熊本県教育委員会	双子塚※2	前方後円墳集成に記載
平成4年	緊急調査	県立装飾古墳館	時期不明土坑1基	横山古墳移転予定地
平成5年	緊急調査	県立装飾古墳館	近世溝2基	実習棟建設予定地
平成5年	緊急調査	県立装飾古墳館	寒原3号墳	本館常設展示
平成10年	測量調査	県立装飾古墳館	双子塚・下原・狐塚測量	本報告中の地形図
平成11年	電気探査	九州大学工学部※3・ 県立装飾古墳館	双子塚墳丘	研究紀要第4集
平成11年	磁気誘導探査	国立奈良文化財研究所 ※4・県立装飾古墳館	双子塚墳丘	平成11年度調査研究事業
平成14年	緊急調査	県立装飾古墳館	双子塚古墳北東側丘陵際	本報告

※1 参考地A/B/Cは、整備後、馬不向2号、馬不向1号、塚原古墳とそれぞれ呼称。

※2 正式名称は「岩原双子塚古墳」

※3 九州大学工学部地球環境工学科 牛嶋恵輔教授、水永秀樹助手による。

※4 現独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 西村康遺跡調査技術研究室長（当時）による。

第3章

第1節 調査の方法と成果

調査区設定に先立ち、削平箇所を工事設計業者の測量を基に確定した。当然史跡内であるため、全域を調査範囲として掘削を行った。なお、前述の通り崩落が予想される崖際は2次災害を避けるため調査を断念せざるを得なかった。

表土剥ぎに当たっては重機を使用した。重機ではⅠ層（芝生養生面・整備時と見られる盛り土）とⅡ層（旧耕作土）までの、約60cmを剥ぎ取った。

続けてⅢ層包含層掘削、さらに遺構検出を行った。この遺構の数を基に、調査に必要な期間や作業量、作業員数を算出。また、平成10年度に設置された基準点を基に5m間隔で、遺構を避けながらメッシュ杭を設置し、グリッド法による調査を行った。

なお、遺構についてはⅢ層中では検出できなかったものの、遺物については極少数ながら円筒埴輪片などが含まれていた。ただし、これらの遺物は、Ⅲ層の堆積時期を判断させるものではなかった。また、Ⅳ層上面で検出した遺構の状況から、Ⅲ層とⅣ層の境は不整合面であり、大半の遺構は上面が削平されていると見られる。

遺構番号は、検出順に1から付した。ただし、調査が進展するなかで遺構ではないことが判ったものもあり、その場合の遺構番号は、抹消して欠番として扱った。遺構の調査終了後、可能な限りトレンチを入れ下部遺構の有無を確認した。その結果、遺構検出面はⅣ層上面の1面のみであり、さらに、遺構は埋土の状態から全て岩原古墳群に伴う時期のものと判断した。

出土遺物から、岩原古墳群に先行した時代の遺跡があったことも判明した。縄文時代晩期の刻目突帯文土器様式の段階では、生活の場として岩原台地の活用が始まっている。続く弥生時代の状況については、出土した土器片が壺の胴部片のみであることからそもそも弥生土器か否かも判別しにくい。今後の課題である。

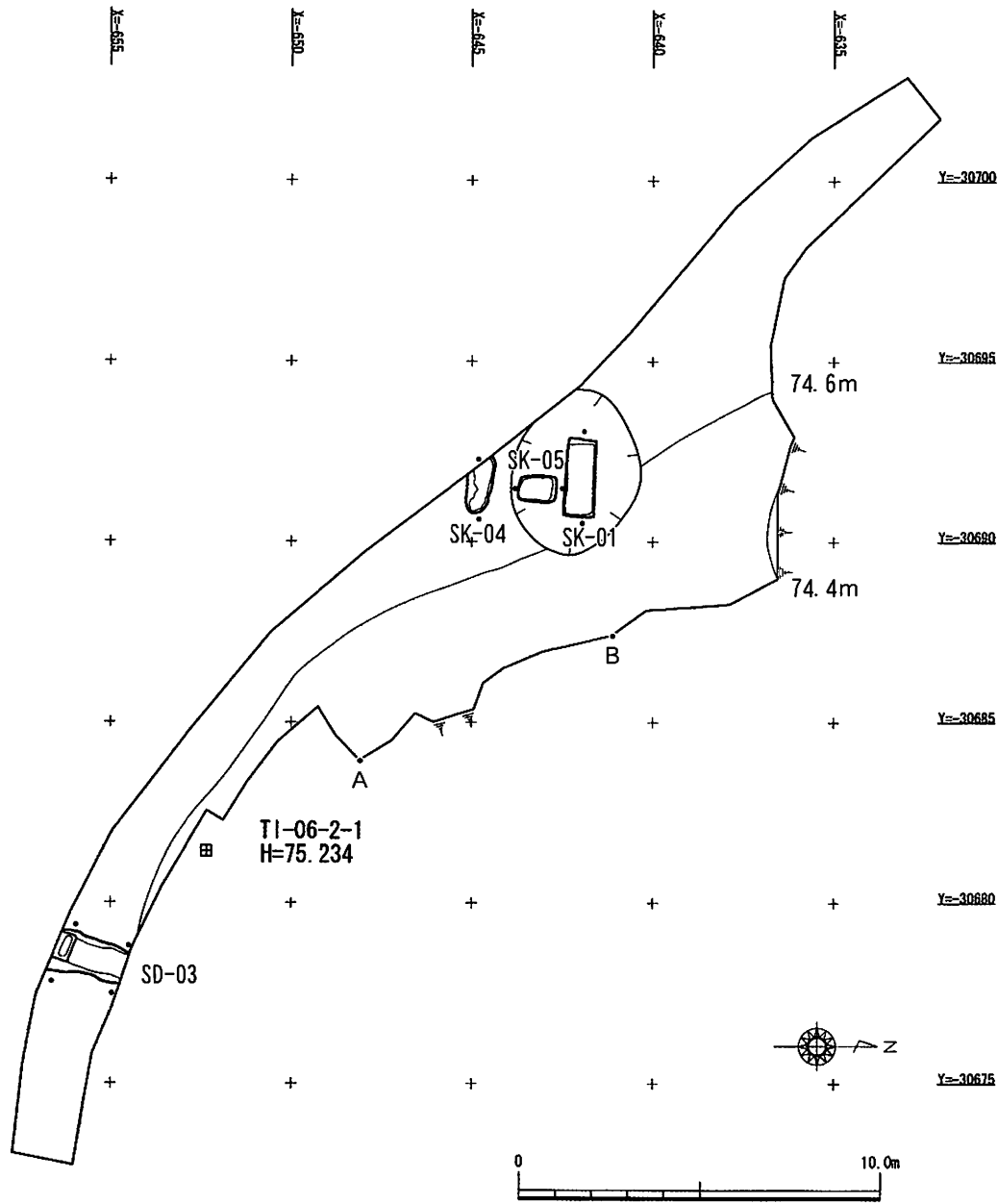


図3 遺構配置図

第2節 層序

- I層：表土層、芝生養生面と整備時の盛り土で構成される。
- II層：旧耕作土層、軟らかい乾いた土質で樹根が多く含まれる。肥後古代の森鹿央地区管理組合会長立山義晶氏（以下立山氏と略す。）からの聞き取りにより、樹

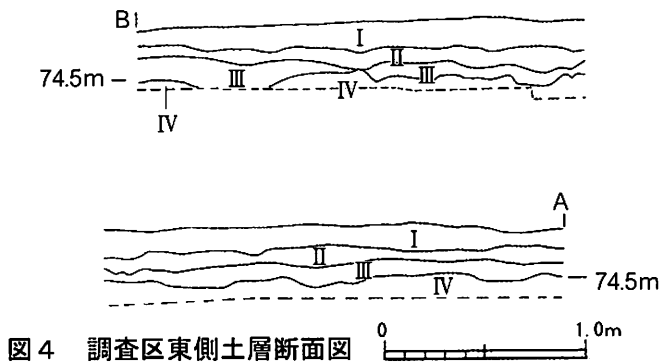


図4 調査区東側土層断面図

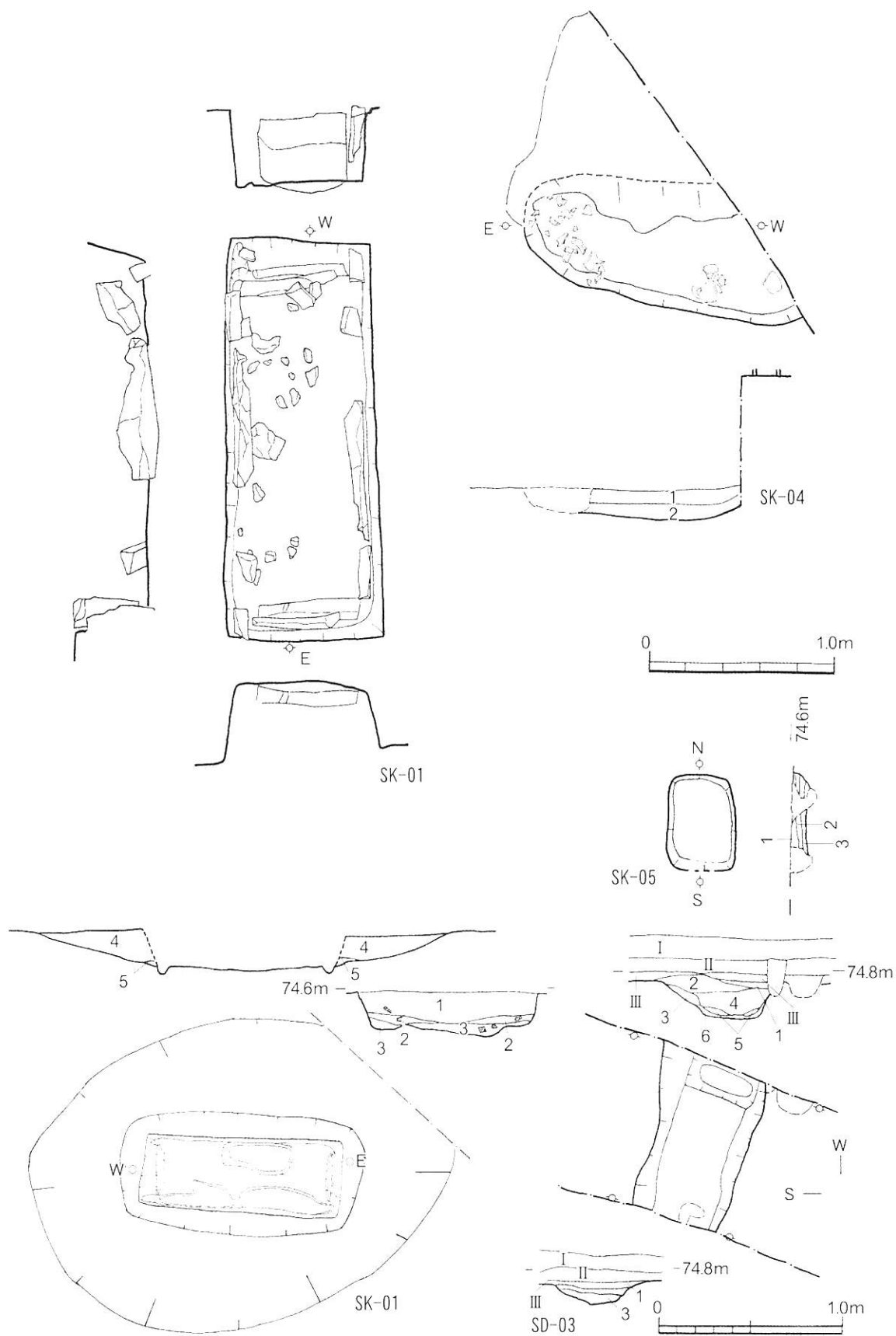


図5 遺構図

根の多くは桑であり、かつての桑畑の耕作土と判る。

Ⅲ層：暗褐色土層、昭和57年調査報告のⅢ層暗褐色土と同一か。先行調査同様、円筒埴輪片が認められた。それ以外にも若干の遺物を含む。

Ⅳ層：黄褐色土層、ローム層と見られる。無遺物層。

第3節 遺構

SK-01 棺身上部が破壊された箱式石棺とみられる。蓋は残っておらず、副葬品・骨片も見あたらなかった。棺内には、棺身の一部と見られる石材片が多数投げ込まれていた。立山氏からの聞き取りによれば、当該調査区内で桑畑開墾時に1基の石棺が偶然見つかったことがあったと言う。その時は鍬で碎けてしまった石片を、ちょうど空いた穴の中に埋め戻したらしい。この遺構は恐らくこの時の石棺であろう。

使われた石棺材は全て凝灰岩である。凝灰岩のなかでも軟質の部類に属し、地元石工の言葉を借りれば「一尺角重さ30kg 程度」の硬さのものである。ちなみにこの程度の重さだと、手で触ると石表面がザラザラと崩れる、所謂菊池川流域で採れる「灰石」である。同様な重さの石材利用は、例えば嘉島町井寺古墳の石室壁面などで見られる。井寺古墳のそれは、宇土市網津の所謂「阿蘇ピンク石」と呼ばれる馬門石であるが、硬度は全く同じものである※5。

※5 平成16年度前期企画展「彫る・刻む阿蘇の灰石展」調査成果による。

墓坑内埋土の状況

1～3層全て、脆い凝灰岩の岩屑を含んでおり、石棺の破碎片と見られる。

埋土1層：やや淡い暗褐色土

埋土2層：黄褐色土混じりの暗褐色土

埋土3層：赤褐色土混じりの黄褐色土

掘込み内の埋土の状況

4・5層とも出土遺物は検出されなかった。

埋土4層：やや淡い黄褐色土

埋土5層：赤褐色土混じりの黄褐色土

SD-03 下原古墳に最も近い。小規模な円墳、或いは円形周溝墓の周溝の一部の可能性もあるが、調査範囲が狭く判断しがたい。円筒埴輪片が埋土中から出土している。位置関係から、SK-01に関連する周溝とは考えられない。SK-01・SK-04と埋土の特徴が同じであることから、古墳時代の遺構と判断した。遺構の東側は恐らく崖の崩落により破壊されている。遺構西側は、底面で一段さらに落ち込み、調査区外に続いている。出土した円筒埴輪は、著しく摩滅していた。埴輪そのものの焼きの悪さもあるが、調整痕の残り具合からみて、流れ込みの遺物と判断できる。ただし、供給源までは特定できない。

埋土1層：やや淡い暗褐色土

埋土 2 層：黄褐色土混じりの暗褐色土

埋土 3 層：暗褐色土、埴輪片が出土。

埋土 4 層：柔らかい暗褐色土

埋土 5 層：暗褐色土混じりの黄褐色土

埋土 6 層：柔らかい黄褐色土

SK-04 SK-01の掘込みの上で検出した。桑の根による攪乱を受けており、円礫が出土したのみで時期・性格ともに不明である。

埋土 1 層：やや淡い暗褐色土

埋土 2 層：黄褐色土混じりの暗褐色土

埋土 3 層：暗褐色土混じりの黄褐色土

SK-05 調査区外に伸びる楕円形の土坑。遺構上面の約半分は桑の根によって壊されていたが、幸い底面のプランは確認できた。一部は、調査区外に伸びるが、埋土がレンズ状の堆積状況をしていることからそれほど大きく拡がらないだろう。外形と大きさから見て土坑墓の可能性も考えられるが、遺構の上部は削平されており、決め手に欠ける。特筆すべきこととして、底面からほぼ完形の須恵器壺を検出した。また土層断面から土器片が抜き取れた。SK-01の掘込ラインに近い位置であることから、切り合っていないものの同時期の所産ではないだろう。但し、両者の時期的な前後関係は不明である。

埋土 1 層：やや淡い暗褐色土

埋土 2 層：黄褐色土混じりの暗褐色土

いずれの埋土にも須恵器壺の破片を含む。

第 4 節 遺物

- 1 円筒埴輪片：SD-03埋土3層より検出、焼きは悪く、赤褐色。外面タテハケ、内面はヨコハケ並びに指頭圧痕が見られる。残存部位の範囲では黒斑は認められない。
- 2 円筒埴輪片：タガの上部に僅かにヨコハケが認められる。1に比べ調整痕の残りが良く、色調もやや薄い赤褐色。Ⅲ層より検出。タガには指によるツマミ、ナデの痕が明瞭に残る。1・2とも別個体と判別できるが、色調・焼成の悪さ・摩滅した状態にそれほどの大差は無い。残存部位の範囲では黒斑は認められない。
- 3 須恵器壺：SK-04から出土。頸部に精緻な櫛書きを施す。内面の調整は、指ナデの他に、底部付近に指圧痕と外面タタキの際についた当て具の擦痕がわずかに見られる。外面の調整は、タタキのあと胴部上面をナデている。胴部下面は、明瞭にタタキ痕が残る。焼成はやや悪く明灰色を呈す。この他、特徴的なものは胎土で、1mm以下の黒色粒が含まれている。口唇部内面の立ち上がりやや甘いことから、TK23或いはTK47段階のものか。
- 4・5 土器片：2点とも調査区の際、SK-04の埋土中より抜き取った。壺の胴部片と見られる。弥生時代終末～古墳時代の所産と見られ、焼きは良く摩滅していない。外面の整形では、タ

タキの後にナデを行い、内面ではハケによる整形を行っている。

6～8 土器片：浅鉢6、深鉢7、素口縁の粗製深鉢片8と見られる。6・7の特徴から、縄文時代晩期後半、刻目突帯文土器様式の範疇に収まるものと見られる。中でも深鉢7は、山の寺式土器の特徴を示す突帯の付き方である。調査区西際の断面、IV層上面に噛む状態で纏まって出土した。追認のためトレンチを入れたが、IV下面からの出土は無かった。調査区の断面には、なおも複数の土器片が深く刺さっており、調査区外に広がっているものと見られる。器壁の調整が剥落するほど残存状態は悪く、薬品による強化処理を施した。

第4章 総括

以下、発掘調査の成果、及び調査時の聞き取りによる情報提供も踏まえ、可能な限り岩原古墳群について述べる。

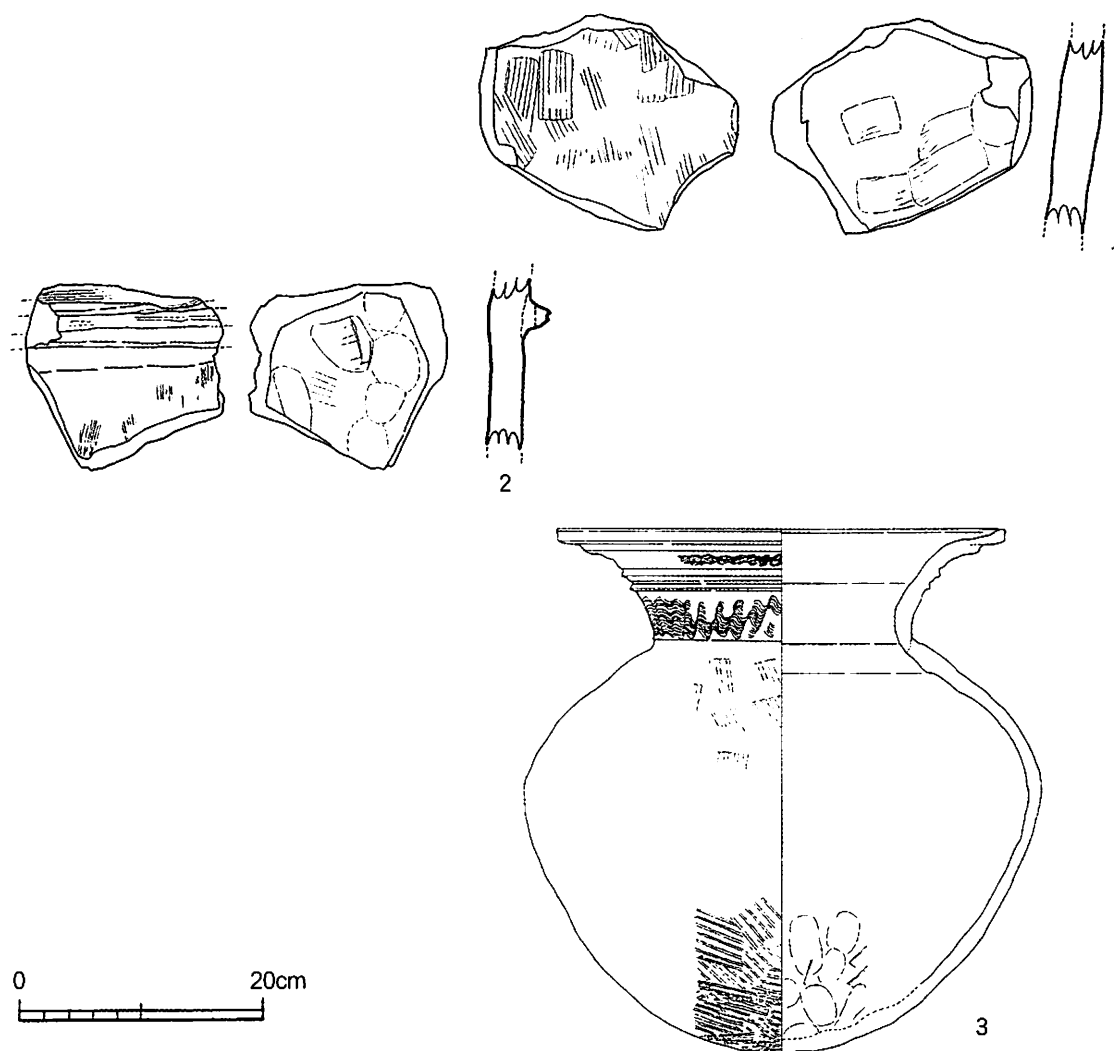


図6 遺物実測図

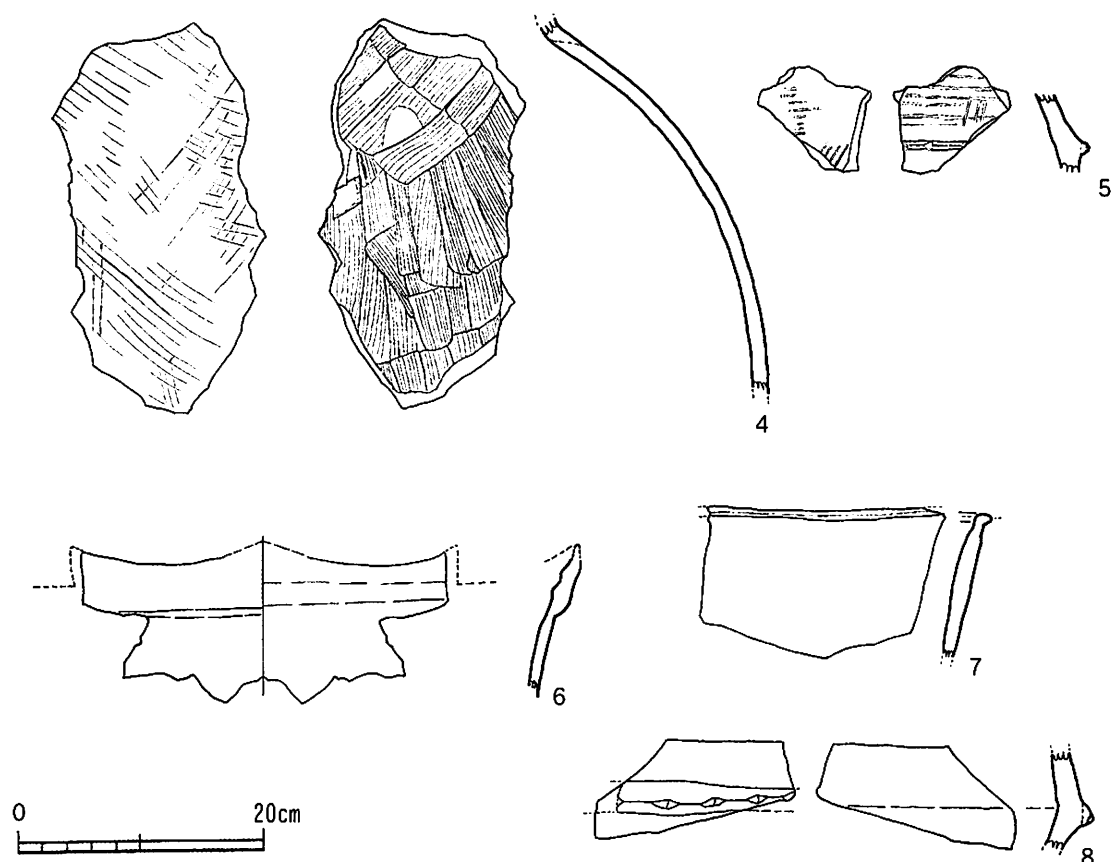


図7 遺物実測図

まず、今回の調査成果として、SK-01のような周溝を伴わない箱式石棺の検出がある。立山氏からは、この種の石棺が集中する範囲は双子塚古墳の西側、岩原横穴墓第Ⅵ群のあるV字谷より南側あたりで、今回の調査区周辺ではあまり覚えがないとのことであった。箱式石棺の広がりさらに別地点にあることを窺わせ、今後の検討材料の一つになるはずである。

次に、調査区南側の溝 SD-03については、調査面積が狭く、古墳時代の遺構と推定できた他は、遺構の性格など詳しいことは判らなかった。出土した埴輪片についても接合も出来ないほど摩滅を受けたものであり、供給源が双子塚古墳なのか、下原古墳なのか、未発見の古墳なのか見当も付けがたい。

また、今回の調査区東側の崖面では、水平な土層の堆積が認められ、かつては東側に平坦地が伸びていた様子を窺うことができた。SD-03の検出状況からも、過去に崩落した箇所に古墳などが広がっていた可能性は否定出来ない。今後、計画的に地元関係者への聞き取り調査を行い、その広がりの範囲をさらに明らかにしていくことが必要だろう。

さらに、今回検出したSK-01のような周溝を伴わない箱式石棺、或いはSD-03のような遺構の検出は、岩原古墳群全体の範囲がより明らかになっただけでなく、円墳、前方後円墳の周囲で構築される墓の規模と範囲を知る手がかりとなる。そういう意味において、小規模な墓が集中するエリアが、双子塚古墳を挟んで反対側の台地西側にあったということは意義深い。

一方、これまでは、周溝を持つ箱式石棺あるいは土坑墓は、県立装飾古墳館エントランスホール前の寒原4号・5号などの一群が知られていた。装飾古墳館建築に先立って行われた調査や、体験学習棟建設の際行われた調査成果を踏まえて、その南限を示そうとするならば、寒原4号・5号付近ということになる。今回の調査ともあわせて、「墓が出た話は余り聞かない」台地北東側のエリアとの違いは何なのか？等々、興味深い課題も生まれた。

古墳群が構築された時期についても、これまで表面採取された埴輪、須恵器片によってしか推定できなかった。SK-05で検出した須恵器によって、古墳群があった具体的な時期について示すことができるようになった。

今後、岩原古墳群を構造的に理解し、菊池川中流域の古墳時代研究に繋がる資料として今回の成果が活用されることを期待したい。

例言・凡例

- 1 調査箇所は、熊本県山鹿市鹿央町岩原字下原2247-1番地、調査面積は約150㎡である。
- 2 現地での発掘調査は、江本直主幹兼学芸課長（当時）の指導の下、池田朋生（主任学芸員）が担当し、吉里美枝子・大友由紀（同嘱託）がこれを補助した。
- 3 四級基準点設置、古墳を含む周辺地形測量、地形図版下作成、並びに、須恵器の実測については（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 4 本報告の遺物トレース・執筆・編集は、学芸課で行い、池田が担当した。
- 5 出土資料は、全て県立装飾古墳館で保管している。
- 6 本報告に使用した方位・座標軸は、国土座標を用いている。
- 7 土層図・遺構図の縮尺は20分の1で、一部の遺構については10分の1で掲載した。
- 8 土層図・遺構図の縮尺は60分の1で、一部の遺構については30分の1で掲載した。
- 9 樹木根などの攪乱の範囲は破線で、調査区の境界線は一点破線で標記した。
- 10 遺構の記号は、溝はSD、土坑はSKとした。
- 11 出土遺物の縮尺は、3分の1で掲載した。

主要参考文献

- | | | |
|-----------|-------|---|
| 田辺哲夫 | 1957年 | 「岩原古墳」熊本史学12号 |
| 隈 昭志、杉村彰一 | 1965年 | 「岩原古墳群を巡る文化財問題」熊本史学29号 |
| 緒方 勉 | 1982年 | 「清原古墳群及び岩原古墳群の周溝確認調査」熊本県文化財調査報告第55集 |
| 隈 昭志 | 1992年 | 「肥後」前方後円墳集成 |
| 牛嶋恵輔、水永秀樹 | 2000年 | 「熊本県鹿本郡鹿央町岩原双子塚古墳の電気探査」熊本県立装飾古墳館研究紀要第4集 |
| 竹中克繁 | 2003年 | 「円筒埴輪の地域性―熊本県地域の埴輪―」先史学考古学論究4 |
| 杉井 健 | 2004年 | 「熊本県地域における古墳時代中・後期の首長墓系譜変動にかんする覚書」西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究 |

調査協力者（順不同・敬称略）

立山義晶、森廣行、隈昭志、前田軍治、小山正子、木村雅子、村田百合子、松本裕子、中原幹彦、野田拓治、中村幸弘、亀田学、宮崎敬士、増田直人、水本寿美子、濱田教晴



図版. 1
集中豪雨による崩落地
地
(発掘調査地)



図版. 2
崩落地
中央奥 岩原双子塚
古墳後円部



図版. 3
崩落地
馬不向古墳東側



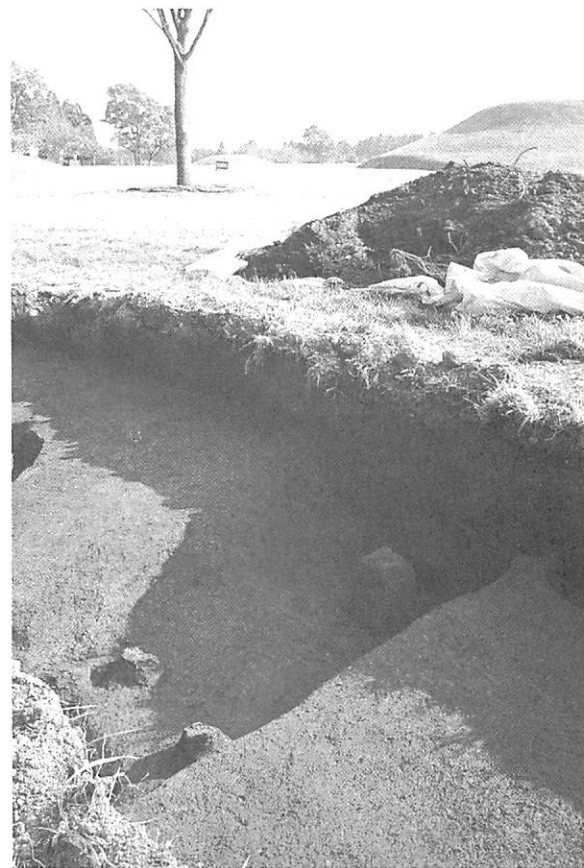
図版. 4 岩原双子塚古墳よりみた調査区



図版. 5 調査区北側検出した遺構(左下 SK-01)



図版. 6 調査区南側手前 SD-03 奥 下原古墳



図版. 7 SD-03円筒埴輪出土状況

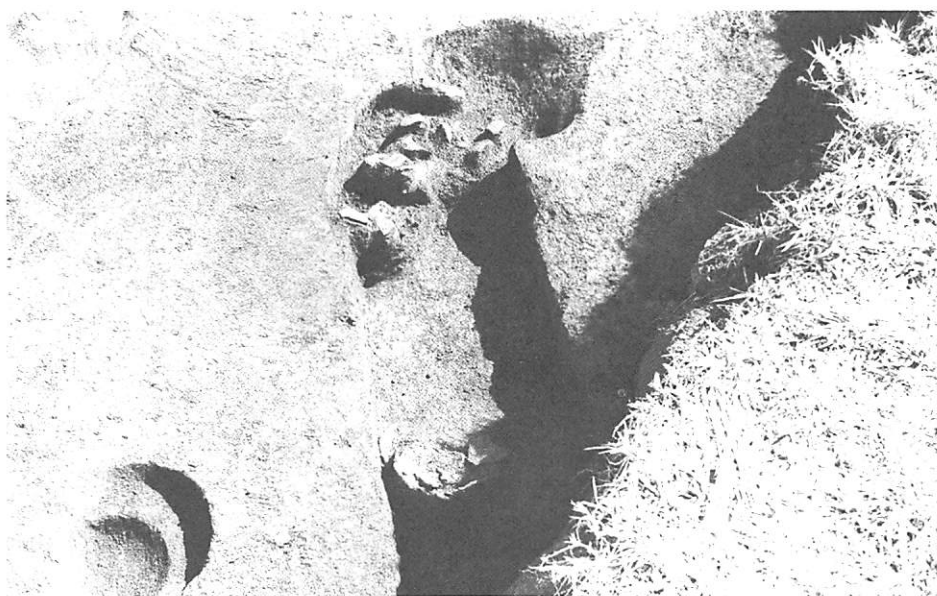
図版. 8
調査区からみた岩原
双子塚古墳



図版. 9 SK-04



図版. 10
SK-05須恵器出土状
況





図版. 11 出土遺物写真